

海外司法スケッチ

The International Court of Justice

国際司法裁判所

La Cour internationale de Justice



「国際法の首都」ハーグ

オランダは、「国際法の父」と呼ばれるフーゴー・グロティウス¹の出身国です。そして、ハーグは、1899年に万国平和会議²が開催されて以来、数多くの法律関係の国際機関や国際裁判所が置かれてきたことから、「国際法の首都」とも言われています。国際司法裁判所(I C J)は、これらの機関の中でも、国際法上の法律問題について判断を下す最も権威の高い裁判所です。

国際司法裁判所とは

国際司法裁判所は、1922年から当時の国際連盟の下で活動していた常設国際司法裁判所³を前身として、1945年に国際連合憲章により、国際連合(国連)の主要な司法機関として設立されました。

国際司法裁判所の主な任務は、第一に、国家と国家の間の紛争について国際法を基準として裁判を行い、これを平和的に解決することです。国連加盟国(191か国)は、事件ごとにされる当事国間の合意や、あらかじめ行われる国際司法裁判所の管轄権受諾の宣言によって、国際司法裁判所の裁判手続を利用することができます。日本も、国

平和宮



1 フーゴー・グロティウス

Hugo Grotius (1583 ~ 1645)

法学者、外交官。国家・宗教の対立を超えた自然法の存在を強調し、国際法の基礎をつくったと言われる。

2 万国平和会議

軍備縮小と世界平和を議題として、ハーグで2回開催され、1899年は26か国、1907年は44か国が参加した。

3 常設国際司法裁判所

紛争の平和的処理を最初に行なったとされる国際的な司法裁判所。1920年に国際連盟によって設立され、ハーグの平和宮にあった。1922年から活動を始め、1940年にドイツのオランダ侵入により活動を停止するまでの間、国家間の紛争29件に判決を下し、27件の勧告的意見を与えた。日本からは計3人が裁判官に選ばれた。1946年、公文書と財産を国際司法裁判所に引き継ぎ解散した。



安達峰一郎 常設国際司法裁判所第4代所長のレリーフ



際司法裁判所の管轄権受諾宣言をしています。

国際司法裁判所の第二の任務は、国際法上の法律問題について、国連総会などからの諮問にこたえて意見を与えることです。このような意見を勧告的意見といい、法的な拘束力はありませんが、国際法上の諸問題について高い権威を有しています。

国際司法裁判所は、設立以来、国境紛争、海の境界画定、武力行使、内政不干渉、外交関係、人質行為、国籍及び通行権等に関する事件につき、これまでに多くの判決や勧告的意見を出しています⁴。



4 事件数

1946年以降、国際司法裁判所では、120件を超える事件を取り扱っている。そのうち訴訟は8割を占める。

トピックス

国際司法裁判所長一行の最高裁判所訪問



町田 顯
最高裁判所長官

小和田 恒
国際司法裁判所裁判官

史 久 鏡
国際司法裁判所長

2004年4月14日、国際司法裁判所の史久鏞(SHI Jiuyong)所長及び小和田恒裁判官が、最高裁判所を訪問されました。

史所長は、中国出身の学者で、1994年2月に国際司法裁判所の裁判官に任命された後、2003年2月から国際司法裁判所長に就かれています。

町田長官との会談は、和やかな雰囲気の中で行われ、現在の国際司法裁判所に係属する事件の審理期間など様々な事柄が話題とされました。

その後、一行は、大法廷を見学し、町田長官をはじめ最高裁判所判事らとの懇談会に参加されました。懇談会では、国際司法裁判所、

最高裁判所それぞれの組織、機能と役割について意見交換がされました。史所長が最も関心を示された話題は、裁判官を補助するシステム、特に、我が国の裁判所調査官制度についてでした。

国際司法裁判所には、裁判官の職務を補助する調査官が、15人の裁判官に対して全体で5人いるものの、必ずしも裁判実務の経験のある者がその職務を行っているのではないとのことでした。史所長は、一定の裁判実務の経験を積んだ裁判官が、最高裁判所で裁判所調査官に任命され、その職務を担っているという日本の制度について、熱心に質問をされていました。

国際司法裁判所の裁判官

国際司法裁判所の15人の裁判官⁵は、国連総会及び安全保障理事会での選挙で選ばれ、任期は9年間です。我が国からは、これまでに、田中耕太郎元最高裁長官（在任1961～1970）、小田滋東北大学名誉教授（在任1976～2003）及び小和田恆元国連代表部大使（在任2003～）の3人が選ばれています。

平和宮

国際司法裁判所は、ハーグの「平和宮」⁶で活動しています。平和宮は、1899年の万国平和会議で設立された、主に国家間の紛争を法の尊重を基礎として解決する常設仲裁裁判所の建物として1913年に完成したものです。その図書館には法律文献の膨大な蔵書があります。また、平和宮2階にある会議室は、壁面が日本政府の寄付による西陣つづれ織りで覆われていることから、「日本の間」と呼ばれています。国際司法裁判所の審理が行われる大ホールには、英国が寄贈した4枚のステンドグラスがあり、それぞれが原始の時代、征服の時代、現代及び平和の達成という4段階による平和に向けての進化を示しています。

5 裁判官

裁判官は、出身国の国際法の教授、大使、最高裁判所裁判官であった人が多く、出身地域ごとに裁判官数の配分が決まっている。裁判官の年俸は16万ドル（2000年時点）で、裁判官は、政治上または行政上のいかなる職務を行うことも、職業的性質を持つ他のいかなる業務に従事することもできないとされている。裁判官は、法廷では、白いレースのひだ飾りのついた黒いガウンを着用する。



大ホールのシャンデリアとステンドグラス

6 平和宮

平和宮は7ヘクタールの公園の中にあり、オランダ・カーネギー財団が所有、管理している。建物は、フランス人のルイ・コルドニエの設計で、花崗岩、砂岩及び赤れんがで作られ、屋根は灰色がかかったスレート製である。建物正面には一連の彫像、左手には高さ80メートルの鐘つきの時計台がある。内部には、各国から提供された木細工やステンドグラス窓、モザイク画、つづれ織り、美術品などがある。



2004年6月28日、ハーグ国際私法会議（HCCH）の外交代表会議（予算の承認などを行う年1回の会議）が「日本の間」で開催されました。



日本代表席

- 標題の写真
- ナゲンドラ・シン ICJ判事が寄贈したICJのマークのレリーフ